

## 使徒行伝16章6－10節 「マケドニア人の呼びかけ」

### 1A 御霊に禁じられた宣教

#### 1B 小アジアでの活動の継続

#### 2B 異邦人のための使徒

##### 1C ペテロの科尔ネリウス体験

##### 2C パウロの異邦人宣教の召命

##### 3C 割礼の有無の克服

### 2A 「地の果て」という命令

#### 1B 言葉での命令

#### 2B エルサレムでの殉教

#### 3B トロアスからの船出

### 3A 堅忍と忠実

#### 1B 反対者の中での広い門

##### 1C ティアティラのリディア

##### 2C カイサルへの背き

##### 3C たった一人での宣教

##### 4C 選びの民

#### 2B 囚人としてのローマ

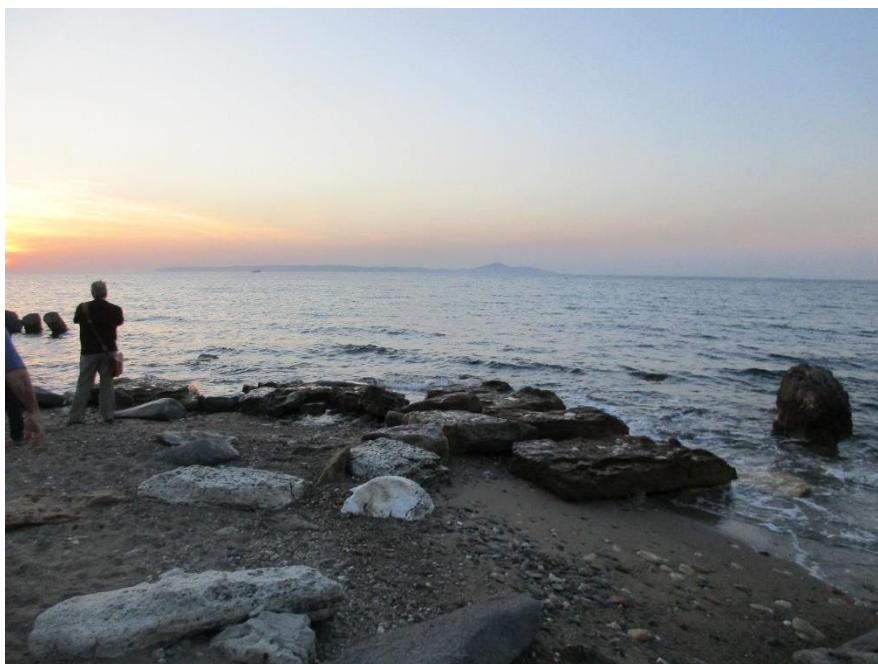
## 本文

使徒の働き 16 章を開いてください。私たちが今朝注目したい聖書箇所は、使徒 16 章の 6-10 節です。「6 それから彼らは、アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フリュギア・ガラテヤの地方を歩いて行った。7 こうしてミシアの近くまで来たとき、ビティニアに進もうとしたが、イエスの御霊がそれを許されなかった。8 それでミシアを歩いて、トロアスに下った。9 その夜、パウロは幻を見た。一人のマケドニア人が立って、「マケドニアに渡って来て、私たちを助けてください」と懇願するのであった。10 パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちにマケドニアに渡ることにした。彼らに福音を宣べ伝えるために、神が私たちを召しておられるのだと確信したからである。」

私たち夫婦は、4月9日から20日までトルコとギリシャの旅行に行ってきました。その旅行のテーマは、「使徒の足跡」です。使徒パウロの辿った宣教旅行の道を私たちも文字通り、辿っていくというものです。また使徒ヨハネも監督していたであろう、アジアにある七つの教会、黙示録にある七つの教会を全て辿りました。

トルコというと、馴染みが薄いかもしれませんが、実は見過ごされている聖書の地と言ってよいでしょう。今でこそイスラエルという国が建てられていますが、聖書の舞台はその周辺国にも及んでいます。エデンの園から流れていた四つの川の二つ、ティグリス川とユーフラテス川は、その上流はトルコにあります。ノアの箱舟が留まったアララテ山もトルコにあります。アブラハムが約束に地に行くように召されて、途中で留まったハランという町もトルコにあります。そして、新約聖書で「アジア」という言葉が出てきたら、それは今のトルコを指しています。これは聖書名だけではなく、トルコこそがアジアの最西端です。日本がアジアの最東端ですね、極東と呼ばれますが、トルコは極西と呼んだらよいのでしょうか。そこに最も大きな都市イスタンブールがありますが、元々の名前はコンスタンティノープル、東ローマの首都として何百年も続いたキリスト教の中心でした。

今、読んだところは、世界史の全てを塗り替えた瞬間と言ってもよいでしょう。福音を携えていた使徒パウロが、アジアからヨーロッパに福音を伝えるように呼び出されたところでもあります。トロアスという港を持つ大きな町がありました。そこから船出して、今のギリシャの北部のマケドニアの港町ネアポリスに向う一歩を踏み出した瞬間です。この小さな一歩は、キリスト教を中心



にした世界史を全て変えてしまった一歩であり、直接、私たちに結びつく一歩です。私たちが今、福音を信じているのは、その多くが欧米の宣教師によるものです。おそらく独自に違う国から福音を聞いたという人は、ここにいる皆さんには、いないでしょう。プロテスタント、またカトリックの教会は、すべて西方から来ました。日本人によって伝えられても、その日本人は何らかの形で欧米の宣教師によって伝えられた福音を信じました。古代に景教というキリスト教の一派が中国にまで来た記録はありますが、どこまで日本に影響を与えたのかは知りません。ですから、パウロがマケドニアに福音を宣べ伝える、アジアからヨーロッパに踏み出したその一歩は、世界を変えたと言っても全く過言ではありません。

### 1A 御霊に禁じられた宣教

しかし、ここでパウロがどのようにして、マケドニアへの宣教に導かれていたかに注目したいと思います。「**アジア**でみことばを語ることを**聖霊**によって禁じられた」とあります。なんと**聖霊**によって禁じられたのです。一度だけではありません。「**ビティニア**」にパウロは行こうとしました。ビティニア



は、トルコの北部、黒海に面する地域ですが、そこに行くのも「イエスの御霊がそれを許されなかった」とあります。著者ルカは、注意深く「御霊」ではなく、「イエスの御霊」と言っていますが、ここにイエスご自身が御霊によって明確に、ビティニアに行くことを禁じられています。福音を語ることは、イエス様の宣教命令なのに、どうして禁じられることがあるのでしょうか？そう、私たちは注意しないといけません。もちろん、宣教命令は主からのものです。しかし、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさいとイエス様は弟子たちに命じられました。けれども、その福音を伝える働きの中に、聖霊に導かれるという要素があります。私たちは、いつまでも主ご自身の命令を聞く、しもべだということです。福音宣教をするという御心は全く変わらないのですが、主ご自身に従うという前提があつての宣教であり伝道です。聖霊に導かれるということを、いつも前提にしてクリスチャン生活を送ります。<sup>1</sup>

### 1B 小アジアでの活動の継続

パウロに対して、「禁じる」ということまで行われた聖霊であられますが、パウロはそれだけ福音を語ろうとする意志が固かったのだと思われます。禁じなければ、彼は絶対にそこに行こうと決めていたと考えられます。アジアには、パウロは第三宣教旅行でエペソに踏みとどまり、そこで宣教しました。長いこと、二年も踏みとどまりました。そこは東方と西方のローマとの貿易をつなぐ中継都市として、とてつもなく栄えていたので、彼がどこのアジアに行くよりも、影響力がありました。

<sup>1</sup> <https://blog.goo.ne.jp/jesus201/e/6a86ce6dbccdd8125b11e398e0c5f250>

「アジアに住む人々はみな、ユダヤ人もギリシア人も主のことばを聞いた。(使徒 19:10)」とあります。その他、小アジアにはペテロも宣教に来ていますし、ヨハネはエペソを拠点にして教会の監督をしていたことが聖書からも、初代教会の文献からも確かめられています。ですから、主は小アジアを軽視していたのは、全くありません。ですからなおのこと、パウロが小アジアで福音を伝えたいということを禁じるということが、彼の理解を超えていたと思います。

しかし、パウロにとって小アジアは、「自分の故郷であり陣地」でありました。彼は、ギリシア語を流暢に話す、ギリシア系ユダヤ人でした。ユダヤ人には当時、元来のヘブル人の伝統と文化を守るヘブル系のユダヤ人と、ギリシア文化の中に生きるユダヤ人と別れていましたが、パウロは、今のトルコの南、地中海に面する町タルソの生まれ育ちであり、ユダヤ人でありながらもギリシア文化や言語に慣れ親しんでいたのです。そして彼はもちろん、エルサレムでガマリエルの下で、厳格な律法の教育を受け、律法を遵守したパリサイ派でした。さらに、ローマ市民でもありました。これは特権階級と断言していいです。生まれながらにしてローマ市民だということなので、両親がユダヤ人だけでも何らかの形でローマ市民権を持っていたと考えられます。

ですから、彼にとってローマ帝国は自由に行き来でき、ローマの前に存在していたけれども、文化と言語はローマ時代にも続いていたギリシア文化をよく知っている人であったけれども、それでも彼にとってはアジアを越えたところ、ヨーロッパは自分の陣地を越えていたところであり、見知らぬところであり、そこにまで福音を伝えようという発想がなかったのです。あのパウロとて、自分の思いや考えを超えたところに、神がおられることを認めざるを得ませんでした。「イザ 55:8-9 「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、あなたがたの道は、わたしの道と異なるからだ。——【主】のことば——天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」

## 2B 異邦人のための使徒

パウロは、異邦人に対する使徒として召されていることを自覚していました。けれども、パウロも他の使徒たちも、また他の弟子たちもみな、イエス様が言われた「地の果てにまで、わたしの証人となる」という言葉、また「すべての国民を弟子としなさい」という言葉の実現に対して、自分の心の中に存在する壁を乗り越えなければいけなかったのです。

## 1C ペテロの科尔ネリウス体験

その大きな一歩は、使徒ペテロの科尔ネリウ



ス体験です。エルサレムの屋上の間で、イエス様が昇天された後に祈っていた時に、聖霊が臨まれた時に聞いていたのは、世界に離散しているけれども五旬節のために集まっていたユダヤ人たちでした。その彼らに、イスラエルに対する神の約束が、イエスによって実現したことを立証したのです。それで彼らが悔い改め、バプテスマを受けて教会が生まれました。ペテロとヨハネは、他のユダヤ人と同じようにエルサレムの神殿に言って、決まった時間に祈りを捧げに行っていました。あくまでもユダヤ人の間で福音が宣べ伝えられていたのです。

ところが、彼がヤッファ(ヨッパ)にいる時に、幻を見ました。それは、天からの敷布のようなものでした。そこに、四つ足の動物、地を這う物、空の鳥などがいたとありますが、レビ記 11 章によれば、それらは汚れたもの、食べてはいけないと命じられているものです。それでペテロは、「主よ、そんなことはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことはありません。(使徒 10:14)」と言いました。そうですね、律法で定められていることですから、ところが主が言われたのです、「神がきよめた物を、あなたがきよくないと言ってはならない。」その意味は、異邦人であるローマの百人隊長、コルネリウスから遣わされた人々によって分かりました。異邦人と食事をするのは、ユダヤ人にとってはご法度です。食物規定を見れば、これでは異邦人の食事に招かれることなんかできないことが分かります。日本食は、だめです。ですから、異邦人の家に入ることもユダヤ人は避けていました。けれども、彼は主が命じられたことに従順でした。そうです、私たちの固定概念は、あまりにも深く浸透しているので、自分に固定概念があることさえ気づいていません。こういった特別な出来事や、異質なものが自分の前に立ちはだかる時に、自分には主に命じられてもいないのに、自分の中で作っている壁があることに気づくのです。

一行は、コルネリウスの住むカイサリアに来ました。使徒の働き 10 章 27 節には、「コルネリウスのことばを交わしながら家に入り」とあります。これは大きな第一歩でした。この一歩によって、神が信仰によって、異邦人をも清めることができ、その信仰によって、神の家族の中に入ることができることを知りました。そして、この一歩がなければ、イエス様の働きとその福音は、ナザレ派とも呼ばれたユダヤ教の一派にしか過ぎなかったのです。イエス様は、ごく小さなユダヤ教の一派がメシアとして信じていたという歴史書の片隅に置かれていた人物だったでしょう。

## 2C パウロの異邦人宣教の召命

そしてパウロ自身には、イエス様は明確に、「わたしはあなたを異邦人に遣わす」と命じておられました。パウロがエルサレムに戻って来て、そこで騒動がユダヤ人の間で起こりました。パウロは引きちぎられるのではないかとと思われるぐらいでしたが、そこにローマの千人隊長が入り込んで、彼を引き出しました。けれども、パウロはここにいる人々に語らせてくれと主張、千人隊長は許可しました。パウロが、熱心なパリサイ人であったこと、けれどもイエスに会う幻を見たこと。これらを証しました。ユダヤ人たちは、ここまではよく聞いていたことでしょう。けれども、主が異邦人に遣わすと命じられたことを語った時に、大変なことになりました。「人々は彼の話をここまで聞いてい

たが、声を張り上げて言った。『こんな男は、地上から除いてしまえ。生かしていくべきではない。』（使徒 22:22）」なぜそこまで、ユダヤ人は反応してしまうのでしょうか？

### 3C 割礼の有無の克服

彼らにとっては、割礼を受けること、また他の律法を守ることは命がけのことでした。私たちがダニエル書を学んだ時に、ギリシアの王でアンティコス・エピファネスが、ユダヤ人に大迫害を加えたことを知りましたね。ユダヤ人にとって大切なもの、幼児割礼や食物規定など、敢えてそれをやめさせて、ギリシアのものを受け入れるようにさせたのがエピファネスです。割礼を受けた母親には、その幼児と母親は殺されました。エルサレムの神殿にはゼウス神が建てられ、祭壇では豚が捧げられました。バビロンに捕え移されたのは、偶像礼拝であり律法の軽視のためだったので、彼らにとって再び異教の枷をはめることは、あってはならないと考えていました。それが、ユダヤ人がユダヤ人たらしめる誇りとなり、それで異邦人との壁を造ることが自分たちを保させる動機となっていました。それで、割礼も律法も守っていない異邦人が、そのままの姿で救われる、仲間に入れられるということはあってはならないことだったのです。

そしてイエスを信じた者たちの中でさえ、そのことを克服できないでいたことが、使徒の働きにも書いてあります。パウロとバルナバがアンティオケの教会で奉仕している時に、割礼を受けてモーセの律法を守らなければ、救われないと主張するユダヤ主義者がやってきたからです。それで激しい議論となり、その議論はエルサレムの教会に持ち越されました。そこで、パウロが異邦人が救われる恵みの証しをしたら、さえぎった者たちが一部にいて激しい議論になりましたが、そこでペテロが立ち上がって、コルネリウスの一家に起こったことを証して、信仰によってのみの救いを確認したのです。ヤコブも確認しました。

ということは、私たちの中にも、イエス様を信じているということであっても、以前からのこだわりで、ただ恵みによって、信仰によって救われる、御霊の力の現われがあるということ、どうしても受け入れられない拘りがあるかもしれません。いや、大なり小なり一人一人が持っています。しかし聖霊が、それを壊しながら、「あなたがたは、ただ神の恵みによって生きているのですよ。」と語られるのです。「ただキリストによって、新しく造られたのですよ。土の器にキリストの栄光の宝が入っているのに、どうしてその宝石を見ないで、人を見ているのですか？」と語られるのです。

### 2A 「地の果て」という命令

イエス様は聖霊をお遣わしになる前に、明確に、地の果てまでに証人となることを明言しておられました。「使 1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となります。」

### 1B 言葉での命令

この言葉に対して、弟子たちはそのとおりに受け入れていたことでしょう。誰もが、これをイエス様の命令だと思って受け入れていると思います。そして、私たちもそうではないでしょうか？「さらに地の果てまで、わたしの証人となります」と言われていることに異論はないでしょう。けれども、これまで見てきたように、ペテロにも、そしてパウロにさえ心の中に壁がありました。私たちはキリスト者として、教科書的に「私は、聖書を、全て靈感を受けた神の言葉だと信じます。」と答えることができます。それが模範的なクリスチャンということになるでしょう。けれども、それが信じているということではないのです。むしろ、イエス様が語られたその言葉を、聖霊の働きによって、自分の心の中の壁、その肉の力が削がれながら、それで従順になって聖霊に導かれる、従うというへりくだりが必要なのです。

### 2B エルサレムでの殉教

そして、主がご自分の命令を守らせるのに、私たちにとっては不快な出来事をお許しになることがあります。そうすることによって、無理にでも、福音を伝えるように導かれることがあります。イエス様が、「エルサレム、ユダヤとサマリアの全土」と言われましたが、エルサレムからサマリアの地域に福音が宣べ伝えられた時のことを思い出せるでしょうか？ピリポが伝道者として、サマリアに宣教に行って、驚くべき奇跡と不思議が行われましたが、それはエルサレムでステパノが殉教したからであります。それまでは比較的自由に、福音を伝えられていたのですが、ステパノが殺害されてから、エルサレムに使徒たちは踏みとどまりましたが、他の者たちの多くが散っていきました。けれども、彼らは宣教命令には踏みとどまっていたのです。「散らされた人たちは、みことばの福音を伝えながら巡り歩いた。(8:4)」そしてその中に執事に選ばれていたピリポもいて、福音をサマリア人に宣べ伝えたのです。そしてステパノの殺害に同意して、キリスト者を片っ端から捕縛していたサウロが、ダマスコに行く途上でイエス様に捕えられます。彼の名がパウロに変わります。

### 3B トロアスからの船出

こういった流れで、今朝の本文があるのです。トロアスからの船出は、パウロが幻で、マケドニア人に助けてくださいと言われて、これでマケドニアに福音を伝えることが主の命令なのだと確認したのです。神の命令は、私たちよりもはるかに大きく、高いところにあります。その高さは、実は私たちが設けている高さ、つまり「これこれがないとイケない」という壁を壊すほどの低さをもっています。恵みの高さなのです。自分の関心度が低い、意識が薄い、むしろ嫌悪感さえ抱いている場合さえある、そんなところに届く低さです。「こんな人は受け入れられない」という人々のところに降りていく恵みは、私たちの思いをはるかに超えており、高いのです。

## 3A 堅忍と忠実

### 1B 反対者の中での広い門

そしてパウロが、主の与えられた啓示に従順になった結果を見てみましょう。そこにも、また別の

信仰が必要でした。それは、「困難の中にあっても、それでもしっかりと立ち、戦い、主に忠実に仕える」という忍耐です。パウロの第二宣教旅行は、コリントの町において終結しますが、そこでコリント人にパウロは、こう言いました。「実り多い働きをもたらす門が私のために広く開かれています。反対者も大勢いるからです。(1コリ 16:9)」マケドニア人が助けてと呼びかけていたのですが、パウロの前には困難が立ちはだかつていました。

### 1C ティアティラのリディア

彼がトロアスから船出して、マケドニアの着き、初めに行ったのがピリピです。そこでは、なんとユダヤ人の成年男子が十人もいませんでした、川辺に集まっている人がいて、安息日にそこで福音を語りました。すると、異邦人ですが神を敬っているリディアというティアティラ出身の女性、つまりアジアの人です、その人の心を主が開いてくださいました。けれども、占いの霊につかれた女から、悪霊を追い出すと、パウロは広場に引き出され、ローマの長官は彼とシラスに鞭を打つように命じ、監獄に入りました。けれども、地震が起こって看守とその一家が主を信じました。ピリピに行った時に、彼らが裁かれた広場、また監獄の跡も見ました。



### 2C カイサルへの背き



そして、テサロニケに行きました。そこでは多くの人々が信じましたが、受け入れられないユダヤ人がたちが煽って、再び彼らを広場に連れて行ったのです。そしてカイサルに背いていると訴えました。それで命の危険を感じて、速やかにテサロニケを出なければいけませんでした。(その町の遺跡にも行きましたが、今もそこはギリシャで第二の都市になっていて、その中心部に遺跡の一画があります。)

そして、そこから車で一時間ほど走りますと、ベレアという町があります。その人々はもっと気高い人々で、パウロの言っていることがはたしてその通りかどうかを、聖書を調べながら確かめて行きました。ところがなんと、テサロニケの者たちがここにまでやって来て騒動を起こしたのです。



### 3C たった一人での宣教

それで、シラスとテモテはそこにおいてパウロだけが、アテネに行ったのです。パウロは、その町が偶像でいっぱいなのを見て、憤りに満ちました。その憤りは、彼らが偽りの神々を拝んでいるということに対するもので、むしろ愛に駆り立てられたものです。けれども、パウロは独りです。限界があります。人々が演説を聞いて一日を過ごす、アレオパゴスというところで、パウロは「知られていない神に」という祭壇について、そこから天地創造の神とイエス様の復活を説きました。わずかに人々が信じただけでした。



### 4C 選びの民

そしてコリントに着きます。そこには、なんとローマからユダヤ人だということで追放された、アクラとプリスキラの夫婦がいました。彼らも主を信じています。また職業も天幕作りでした。そしてシ



ラスとテモテがマケドニアから下ってきました。それでパウロは御言葉を語ることに専念したのです。主を信じる人々が起こされてきました。ところが、ここでもまた口汚く罵るユダヤ人たちがいました。そこで彼はかなり気落ちしたのでしょうか。心が折れそうになっていました。その時に主イエスご自身が現れてくださいました。「恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけません。わたしがあなたとともにいるので、あなたを襲って危害を加える者はい

ない。この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。(使徒 18:10)」主が共におられました、そうです、イエス様がすべての国民を弟子としなさいと命令された時に、「見よ、世の終わりまで、わたしはあなたがたと共にいる。」と約束されていました。福音宣教に関わっていれば、必ず伴っている約束があります。「わたしが、あなたがたと共にいる。」です。そのご臨在こそが、困難に満ちた宣教を支え、可能にしてくれます。

そしてケンクレアから船出して、第二次宣教旅行を終えます。エペソも立ち寄りますが、そこではほとんど語らず、カイサリアに行き、エルサレムに立ち寄って、それから北上してアンティオケに戻ります。いかがでしょうか？心の中では、確かに主の恵みがあったけれども、それでも困難や反対に満ちている旅でした。ここで重要なのは、「しっかりと立つ」ということと、「忠実に伝える」ということです。先ほどの信仰は、恵みの大きさを受け入れるための信仰でした。ここでの信仰は、困難や

反対があっても、それでも主がそこにおられ、ご自分の働きをされているという信仰です。

## 2B 囚人としてのローマ

そしてパウロは、ローマにも行かなければいけないと思いました。けれども、まず自分の同胞、エルサレムにいるユダヤ人に語ってから、それからローマに行く計画を立てました。計画や準備は、とても大切です。しかし、その計画や準備の中で、自分たちの思いを越えて働かれる神がおられます。再び、不快なことを利用して神は事を運ばれます。

パウロはエルサレムで、先ほど話したようにローマの千人隊長に身柄を拘束され、そのままカイサリアで監獄に入りました。そして、いつまでも埒のあかない裁判を受け、パウロはカイサルに上訴しました。そして囚人として、ローマに行きます。しかも暴風で、船が遭難しそうになりながら、です。けれども、ローマでは自費で借りた家で、いわば軟禁状態で生活していました。その時のことを、使徒の働きはこう締めくくっています。「少しもはばかりことなく、また妨げられることもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。(28:31)」すごいですね、鎖がつけられたままですが、少しも憚ることなく、妨げられることもなく、福音を伝えました。みことばには鎖はつながれていない、という信仰がパウロにはありました。ここで獄中書簡と呼ばれる、エペソ人への手紙、コロサイ人への手紙、ピリピ人への手紙、そしてピレモンへの手紙をパウロは書きます。

私たちが、マケドニア人の呼びかけに答えることはできるでしょうか？自分の心の中の壁を、主の恵みが壊そうとしておられます。そしてそれに従順になった後も、困難が待っています。しかし、これまでにない、イエス様のご臨在を知ることができます。この方を知ることのすばらしさに比べたら、今までの知識や経験はちり芥だとパウロは言いきりました。どうか、体を動かしてください。神の御霊に導かれて進んでみてください。